

浮世絵に見る帯留と帯揚げの形成に関する一考察

福田 博 美*

Formation of Obidome and Obiage through Ukiyo-e

Hiromi Fukuda

要 旨 江戸時代後期、女帯は、幅が一尺にまで広がり丈も長くなった結果、様々な帯結びが形成された。帯地には縹子や紵などが好まれ、裏地を緞子などの別裂で仕立てた鯨帯も流行した。縹子の帯は締め良さに反して、解け易いという欠点があった。そこで、身近にある紐を締めて抑えた。その紐が文化年間（1804-18）に発生した胴メ、上メと称された帯留である。

初期帯留の中で注目されるのは、帯枕の付いた帯留である。そこで本稿では、文化年間から幕末の浮世絵に描かれた帯留を類別した結果、総数55点中、帯枕の付いた帯留はしごき紐28点のうち2点、くけ紐17点のうち1点、組紐6点のうち1点に見出され、金具付4点には未見であった。帯枕は、路考結や一つ結など高く結んだ帯を保型するために形成され、綿を入れた袋状のものに紐を付けて仕立てた。しごき紐に帯枕を納めた帯留は、帯中央から次第に帯上部で着装され、帯から離れた際に帯留（紐）は別に締められた。その形状が帯揚げに類似する点からしごき紐の帯留が帯揚げを形成したと捉えた。また、帯枕にくけ紐、組紐を付けた帯留は、帯留と帯枕に二分された。すなわち、初期帯留から帯揚げは派生したのである。

序 言

1. 帯 留 の 発 生

帯留は、結んだ帯が解けないように、その上に締める細紐で、今日では帯締と称される。そして、帯揚げは、帯結びの形を整えるために締める紐で、背にあたる中央には帯枕を芯に入れる。これらに関する従来の研究には、前者は、文化年間（1804-18）に発生し、幕末から明治（1848-69）初期に後者が加えられたとみられ、両者は別個に形成されたとされる¹⁾。ところが、文化年間から幕末の浮世絵に描かれた初期帯留の中で注目されるのは、帯枕の付いた帯留である。そこで、本稿では、初期帯留から帯揚げは派生したのではないかと推察した。それを実証するために、当時の浮世絵に描かれた帯留を対象としてその形状・材質、着装者と着装法および帯留を伴う帯結びとの関係を捉え、帯枕の付いた帯留の形状、材料を明らかにすることによって帯留と帯揚げの形成を解明するものである。

これについては既に述べられているので、それらを要約すると以下のものである。享保17（1732）年序、三宅也來著『萬金産業袋』巻之四衣服門○帯地類には、「幅二尺五寸たけ一丈、また一丈二尺帯だけに織出す、二ツわり女帯」²⁾と女帯の幅は約37cm、丈約3～3.6mと記されている。また、江戸時代後期の風俗を記した文化7（1810）年に成る随筆『飛鳥川』には、「帯の幅四寸八分古法の処、近年は一尺はゞも有也。」³⁾と記され、約15cmであった帯幅が文化年間には倍の約30cmにまで広がったとある。その結果、様々な帯結びが形成され、文化10（1813）年刊『都風俗化粧伝』第六容儀之部では21種の帯結びが図示された⁴⁾。

当時の洒落本に遊女の帯姿を求めると、宝暦年間（1751-64）の『風俗七遊談』には「はやるは……白ぬめの帯」⁵⁾、『永代蔵』には「帯は黒しゆすをりきみて」⁶⁾、明和8（1771）年の『遊里の花』には「黒縹子の帯」⁷⁾、安永8（1779）年の『美地

* 本学講師 日本服装史

の蠣殻」には「緋ぬめの帯」⁸⁾、寛政3(1791)年の『大磯風俗仕懸文庫』には「極上の黒じゆすのおびひとへむすんでさげ」⁹⁾、同じく寛政年間(1789-1801)の『青楼惚多手買』には「赤糸とき糸のまじった黒じゆすの帯」¹⁰⁾、『三人酩酊』には「花色しゆすの帯」¹¹⁾と記され、江戸中期以降、その帯地には、縹子や紬など光沢のあるものが好まれた。また、文政10(1827)年の『新宿晒落梅ノ帰咲』には「小柳と黒しゆすのくじらおび」¹²⁾とあり、本絹の小柳縹子が町人にまで普及した様子が記され、天保3(1832)年刊の人情本『春色梅児誉美』には「しやんと結びし小柳の帯も目に立つ当世風」¹³⁾と、小柳縹子の流行が見られた。それを女中が締めるのはもったいない(『三狂人』)と記されている¹⁴⁾。さらに、宝暦年間の『夢中生楽』には「昼夜仕立の幅広の帯をずんとじだらくにときかけ」¹⁵⁾、明和7(1770)年の『蕩子筌枉解』には「くろじゆすともふのくじらおび」¹⁶⁾、安永5(1776)年の『無論里問答』に「萌黄天鵲絨と白地に金入の昼夜帯」¹⁷⁾、前掲『美地の蠣殻』には「くろびろうどに。金さらさおりと。腹合せの帯。」¹⁸⁾と、裏地に別裂を用いて仕立てた昼夜帯、鯨帯、腹合帯が流行した。そして、文政9(1826)年刊『色深狹睡夢』によると「越川仕立のくじらおび」¹⁹⁾が通人に流行ったとある。縹子地の帯は、締め良さに反して解け易いという欠点があった。そこで、その上に身近にある紐を締めて抑えた。江戸時代後期の風俗見聞随筆『続飛鳥川』(又追加)には、「婦人の帯へ胴メ、文化の頃より、……始る。」²⁰⁾とあり、前述の『色深狹睡夢』には、「色糸入の眞田の上じめ」²¹⁾と記される。すなわち、これが胴メ、上メと称された帯留のはじまりである。

女帯の発達には、当時の美人画にも顕著であるが、清長(1752-1815)や歌麿(1753-1806)の描いた幅広の帯に帯留は確認できない。帯の上に紐を結んだ姿の初見は、寛政中期に成る豊国(1769-1825)画「成田山開帳之図」の町人女性である。しかし、この紐は、前垂の付紐であった。同様の姿は、文化年間以降にも、国貞

(1786-1864)画「神無月はつ雪のそうか」の夜鷹や「春待月娼家の餅花」で餅を伸す下働きの女、英山(1790-1848)画「喜撰茶屋の女」の水茶屋の娘に見られた。江戸末期に成る『類聚近世風俗志』第11編女扮下には、「前垂唐棧の類紐はちりめん紬紐也蓋腰帶を用ひず前垂を以て兼之る」²²⁾と記され、前垂の紐は、しごきの代用として帯中央で結ばれた。

2. 浮世絵に見る初期帯留

浮世絵に見る帯留の描写は、前述の胴メと同じく文化年間にはじまる。初期帯留の対象を幕末までの浮世絵に絞り、それに描かれた帯留を見出した結果、総数55点に見られ、作画年代順に配列して表1に示す。国貞の作品には31点頻出し、紐一本の描写を見逃さない写実性の高さが伺える。

(1) 形状・材質

帯留の形状は、しごき紐、くけ紐、組紐、金具付の4種に大別された。金具付の多くは組紐であるが留金具に注目して別項目とした。

1) しごき紐の帯留

しごき紐の帯留は28点(No.1~3, 7~9, 12, 14~17, 19, 23, 24, 31~35, 40, 41, 44, 45, 48, 49, 52, 54, 55)見出された。帯留が身近にある紐の活用であることから、腰帯のしごきを用いることは、その融通性からも指摘できる。先述の『類聚近世風俗志』第18編妓扮には「三都とも……先づ専緋無地或は絞り又は浅葱縮緬の引しごき帯を襲用する也」²³⁾とあり、緋色無地または絞りや浅葱色の縮緬のしごき帯が普段用いられていたようで、3点(No.7, 44, 45)を省く25点に緋色またはそれに類するものが見られ、そのうち絞りの描写は4点(No.1, 8, 14, 32)確認された。これは、当時流行った緋縹袴の裁ち端布を用いたものと思われる。

外出姿では、当初しごき紐の帯留と共裂の腰帯(No.1)であったものが次第に別裂の腰帯(No.24)へと変わり、しごき紐が帯留として二

表1 初期帯留の描かれた浮世絵

No.	作 画 年 代	絵 師 名	題 名
1	文化9 (1812)	菊川英山	：春霞花行列
2	文化年間 (1804—18)	歌川豊国	：美人時世姿
3	文化末期	歌川国貞	：七小町・見立雨こひ
4	同	同	：同・応需見立関寺
5	文化12～13 (1815—16)	同	：当世美人合・三光きどり
6	文化末～文政初頃	歌川国安	：花やかに
7	文政2 (1819)	歌川国貞	：ギヤマン船
8	同	同	：切子灯籠
9	文政4 (1821)	同	：今様見立土農工商・商人
10	同5 (1822) 頃	溪斎英泉	：秋葉常夜燈
11	同	同	：同
12	同	歌川国安	：日吉山王祭礼附祭之図
13	文政年間 (1818—30) 初	溪斎英泉	：東都名勝十景・高輪の秋の月
14	同	同	：奉納提灯・紀の国屋小春
15	同	歌川国安	：両国の花火
16	同	歌川国貞	：星の霜当世風俗・若衆鬘の女
17	同	同	：奉納提灯・八百屋お七
18	同	同	：浮世名異女図会・深川新富士
19	文政前期	同	：集女八景・漁村夕照
20	同	同	：当世三十式相・あづまのお客もうき相
21	文政中期	同	：当時高名会席盡・芳町桜井
22	文政後期	同	：江戸の夜
23	文政末頃	同	：鳥追い
24	同	歌川豊重	：東都御殿山花見之図
25	文政年間	歌川国貞	：娘と羽子板・五代目岩井半四郎
26	同	魚屋北溪	：古今狂歌撰・御殿女中・花見
27	文政年間か	溪斎英泉	：当世点眼鏡・神田明神
28	同	歌川国貞	：唐人踊り
29	同	同	：同
30	同	同	：同
31	同	同	：江戸芸
32	同	同	：船送り
33	同	同	：螢狩り
34	同	同	：当世・薄化粧
35	同	同	：名筆浮世絵鑑
36	同	同	：十二月月乃うち睦月
37	同	同	：同 如月
38	同	同	：北国他所行
39	同	同	：懷中鏡・おはん長右衛門
40	文政末頃か	歌川国安	：花
41	同	同	：東都名所・柳嶋乃妙見
42	天保年間 (1830—44)	溪斎英泉	：江戸芸妓図
43	天保年間か	歌川貞房	：五節句之内・三月
44	弘化 (1844—48) 頃	歌川国芳	：駒形の朝霧

45	嘉永2 (1849)	歌川国貞	: 三代目岩井桑三郎の八百屋お七
46	同 5 (1852)	同	: 其姿紫の写絵・五十四大尾
47	同 6 (1853)	国貞・広重	: 風流源氏絵合・嵯峨野風景
48	嘉永年間 (1848—54) か	歌川芳秀	: 両国やみ
49	安政2 (1855)	歌川国貞	: 雨宿り
50	安政年間 (1854—60)	同	: 東海道五十三次の内・平塚
51	同	歌川広重	: 尾張熱田七里の渡
52	万延元年 (1860)	落合芳幾	: 江戸むらさ記
53	文久2 (1862)	二代広重	: 諸国名所図会・尾張熱田海岸
54	慶応元年 (1865)	豊原国周	: 当世見立て風つくし
55	安政～慶応 (1854—68)	同	: 東京三十六会席

分されたことがわかる。

2) くけ紐の帯留

くけ紐17点は、丸ぐけ紐11点 (No. 6, 10, 20, 22, 26, 28, 36, 37, 46, 47, 50), 平ぐけ紐6点 (No.25, 29, 30, 42, 51, 53) から成る。しごき紐に比べてくけ紐が少ない点は、前述『類聚近世風俗志』同頁および同書に「見世附のをやまは紵帯を用ひず必らずしごき縮緬帯」²⁴⁾とあることから遊女にはしごき紐の方が多く使用されたのである。また、これは先述の前垂の紐に発するものとも思われる。

国貞の三枚続「唐人踊り」では、縹色の丸ぐけ紐1人 (No.28), 平ぐけ紐2人のうち緋色 (No.29) と浅葱色 (No.30) の別があった。浅葱色のくけ紐は、襦袢の掛襟の材質と同様の描写が見られることから襦袢の他、身近にある裁端からくけ紐を作り、襟元と帯留の紐を対にした粋な姿 (No.30) と見られる。

3) 組紐の帯留

組紐6点 (No. 4, 11, 13, 18, 21, 27) には、丸打ちの他、真田紐も多く、これは、当時、紙入の胴メにそれが使われたことと共通する。留具としての真田紐の多様化は、紙入や帯留ばかりでなく、葉箱、文箱や運搬用の挟み箱の結びに活用された。元来、真田帯が男子の帯地として用いられ、このように普及していく過程で女帯の紐にも取り入れられたのであろう。

4) 金具付帯留

金具付帯留は4点 (No. 5, 38, 39, 43) 見出された。図1 (No.43) では、前帯姿に見ら

れ、丸く装飾した留金具が強調される。帯に前提を挟んだ点も年配者を特色づけた。それに対して、娘姿 (No.39) には、身ごもった秘密を暗示させる腹部の膨らみに方形の留金具が明示される。この帯は、腹合帯というよりも二枚の別裂を巻き付け、その一方に緋絞り地を使い、それが帯上部に覗いて帯揚げのようである。

金具に関して貴志孫太夫自筆稿本『鵜真似草紙』には、「帯留といふて銀にて金物を作り夫え平組又さらさ或は金さ、へり和蘭陀もの銀さ、へり同など付る」²⁵⁾とあり、銀製の留金具には、オランダ製金銀の笹縁が付けられたとされる。和蘭陀ものとは、当時海外よりの渡来品の汎称である。『蜘蛛の糸巻』には、「安永の末の頃より丸角はやり出し (今も室町に店あり) 銀の桜鉾に織部形なり」²⁶⁾とあり、金具細工は紙入や煙草入にも施された。また、前掲『鵜真似草紙』の帯留の図には、「紋所花の丸文字又は歌舞伎役者の紋所など人々の好みにて男女とも用ひぬ或真鍮にくるめ、赤銅にても作りたり」²⁷⁾と記される。銀以外の赤銅や真鍮は、文政に流行した襟はさみや煙草入の細工にも使用され、細工の模様には歌舞伎の流行が反映されているようである。

金具付帯留は、パチン式帯留とも称され、それを求めることは、現存する近世遺物たるパチン式腕守よりさほど困難ではないようであるといわれる²⁸⁾。この腕守は、嘉永 (1848—54) 始め頃 (『類聚近世風俗志』第30編雜器及囊)²⁹⁾、血気盛んな男性や遊女の二の腕に巻かれた肌守

である。細い筒状の輪の中に守札を納め、金具で留めた。この材質は、遺品および浮世絵描写上からも天鵝絨が多く、起毛の特性が肌に密着するのであろう。天鵝絨は、帯留の素材には用いられず、帯地としては、天明3(1783)年刊『徒然晝か川』に「天鵝絨の帯はおもうていやじやの」³⁰⁾と記している。ところが、文政頃には天鵝絨の帯姿(No.35)が見られ、その重量を支えるためにも帯留が必要となった。

さらに、三枚続の国貞画「江戸芸」「北国他所行」「田舎娘」では、遊女と見られる前者2点に帯留が描かれ、江戸では図2(No.31)に示すしごき紐と吉原他の遊里では金具付(No.38)とに区別され、田舎娘にはそれが見られなかった。これは、帯留にも流行があり、地方にまでは普及しなかった様子を示すものではないだろうか。

(2) 着装者と着装法

帯留の着装者は、遊女に39点、町人に7点、武家婦女子に8点見出された。中でも遊女に多出する背景は、先述の『類聚近世風俗志』第18編妓扮に「三都とも官許遊女も平衿略帯を用ひざるに非れども先づ専……引しごき帯を襲用する也」³¹⁾とあり、しごき帯が日常用であったことによる。また、天明5(1785)年の洒落本『粋宇瑠璃』に「今の世の中町の婦人の風俗も。ひたすら遊里の端手を模すやうになりぬ。」³²⁾とあるように、町人女性の姿態が遊女の風俗を

真似て派手になってきたことによる。

帯留の形状別に着装者を分類すると、しごき紐28点のうち遊女は21点(No.2, 3, 7, 8, 14~17, 19, 23, 31~34, 40, 41, 45, 48, 52, 54, 55)、町人は3点(No.12, 35, 44)、武家は4点(No.1, 9, 24, 49)、丸ぐけ紐11点のうち遊女は5点(No.6, 10, 20, 22, 28)、町人は1点(No.50)、武家は5点(No.26, 36, 37, 46, 47)、平ぐけ紐6点のうち遊女は5点(No.29, 30, 42, 51, 53)、町人は1点(No.25)、組紐6点は遊女(No.4, 11, 13, 18, 21, 27)のみ、金具付4点のうち遊女は2点(No.5, 38)、町人は2点(No.39, 43)である。武家婦女子に平ぐけ紐、組紐、金具付は確認できなかった。

次に着装法では、帯留を斜めに締めた姿が遊女に10点(No.2, 3, 10, 11, 19, 27, 29~31, 40)見られた。中でも英泉の三枚続「秋葉常夜燈」では、芸子が黒の丸ぐけ紐(No.10)と図3(No.11)の年若の女性は組紐の帯留をいずれも斜めに締めている。これは、無造作に締めたためとも、形を保つ効果的な用法とも思われる。しかし、天保(1830-44)以降になるとそれは見られず、帯上部で締められるように変わる。一方、武家婦人は、帯留を帯の中央またはやや上部で真横に結んでいた。当時、武士の着装に品格が求められた背景の下に紐一本の結び方にも細心が払われたのではないだろう



図1 年配婦人の外出姿

前帯に金具付帯留を廻し、帯に紙入と前提を差し込む。



図2 鼻紙を持つ江戸芸者

一つ結の鯨帯を前上部で折り返し、しごき紐の帯留を帯上部に締めた。



図3 棲を取る遊女

組紐の帯留を斜めに締めた遊女は煙草入を手にする。

か。

(3) 帯留と帯結びとの関係

安永9(1780)年序の洒落本『隣壁夜話』に「今は路考むすびとやらに四角にしやんと高く結び」³³⁾と記されるように帯留が用いられた帯結びには路考結が多く16点(No.7, 8, 11, 13, 15, 22~25, 27~30, 38, 51, 53)見られた。同様に帯を高く結び垂らした一つ結は8点(No.2, 10, 18, 19, 31, 32, 42, 48)確認された。重量が増した帯を高く結び保型するために帯留は形成されたのである。

次に図2・3に示すように黒縹子等の腹合帯の上部を少し折り返した特色が13点(No.2, 7, 8, 11, 12, 18, 19, 25, 28~32)見られた。

また、腹合帯を二つ折にし、前方で緩やかに交差させて結んだ姿(図4, No.34)は、文政3(1820)年刊『甲斐妓談角鶏卵』に「黒じゆすにひどんすをくじらにした中巾帯をしどけなくむすび」³⁴⁾と記された鯨帯の中幅帯を緩やかに結んだ姿態と同様である。帯結びに不安定さが生じた結果、帯留が必要となったのである。しかし、中には帯留を締めない姿も見られる。この点は、豊重(1777-1835)画「新製錦手猪口」、英泉画「浮世美人十二箇月」で屈めた腰には帯結びの間を通して斜めに締めたしごき紐が見られることから解明される。この紐は、お

そらく立姿では隠れる紐であることから、表面上見られないが帯結びの間に紐を通して抑えたことが確認される。なお、描写上から帯地の素材を断定することは難しいが、腹合帯は、美的効果の目的に加えて片方の地質に滑りにくい生地を用いた実質的なものと推察される。

3. 帯枕の付いた帯留

帯枕の付いた帯留は、しごき紐に帯枕を納めたもの2点(No.14, 34)、くけ紐に1点(No.6)、組紐に1点(No.4)見出され、金具付には確認されなかった。いずれも身支度する遊女の傍らに描かれたものである。それらを図4~7に示し、形状および帯枕の材料を明らかにしたい。

(1) 形状

1) しごき紐に帯枕を納めた帯留

図4には、帯を締めようと口にくわえたしごき紐が見られる。口元には、その中に納められた楕円形の帯枕が確認される。また、図5(No.14)では、絞りと見られるしごき紐の中央部に帯枕の膨らみが描写される。これら2点の形状は、現在の帯揚げに類似するものである。

2) 帯枕にくけ紐を付けた帯留

図6(No.6)は、桜の模様を配した丸みのある筒状の帯枕に丸ぐけ紐を付けたものであ



図4 しごき紐の帯留をくわえた遊女
鯨帯を二つ折にし、緩やかに結ぶ遊女の口元には帯枕が描かれる。



図5 帯を結ぶ遊女の足元に置かれた装身具
左奥には、絞りのしごき紐の帯留が置かれ、右には鼻紙を束ねた紙入と小箱が見られる。

る。中央部の膨らみは綿を詰めたような表現が見られる。また、傍らにある紙入も同様の模様が描かれ、共裂に仕立て対にしたおしゃれと伺える。

3) 帯枕に組紐を付けた帯留

図7 (No. 4) の形状は、長方形で厚みのある帯枕の両端に輪の金具を留め、房飾りのある丸打ちの組紐を付けている。薄紅色の帯枕には、緑色の花文が描かれ、紐は白黒で、その長さは胴を一廻り締めて結び切る程度と見られる。

(2) 帯枕の材料

以上の帯枕はどのような材料で仕立てられたのであろうか。それ(材料)は髻入、小枕および腰挟みに類似するものと推定される。

髻入とは、女髪(丸髻)を結う時、髻の中に入れる張子の型を指し、髻型、母衣ともいう。『類聚近世風俗志』第11編女扮下では、「厚紙と附木を以て製、之し綿を入れて肉とす周りは綿糸を以て縫附木はうすき板也」³⁵⁾とある。文化14(1817)年刊『四十八癖』三編には「張紙で製へた髻入れといふものが流行つたつけが」³⁶⁾と記され、当時張子が重宝に利用されたことがわかる。また、結髪には小枕が髻と共に用いられた。「表に絹を以て包、之上方絹端を折入れ尻は圖の如く聚め縫たり」³⁷⁾(『類聚近世風俗志』同頁)とされる小枕は、文化の頃より町方にお

いて廃れたといわれる(『嬉遊笑覧』³⁸⁾)。女性が身近にある結髪用具を装身具に活用することは可能であり、材料が入手しやすく、製作工程も押絵細工等に近い点からもこれらを帯枕に取り入れることは容易であろうと思われる。

前述の『都風俗化粧伝』第六容儀之部に「帯巾の広き狭き、時々が変わり、或ときは巾の狭きを好み、或時は巾の広きを当世風なりとす。」³⁹⁾と記され、前帯の時、出尻を隠す目的で腰挟みが着用されたとある。これに関して同書には、「腰ばさみしようは、絹にても木綿にても腰巾ほどにひらたき袋をこしらえ、これにわたをつめ、下の方に多くわたを入れ、上の方へ段々と薄く入れて、背と一ようになるようにつくる也。」⁴⁰⁾と記される。さらに、これを衣類の上や帯の下にするのもよいと指摘している。江戸時代後期には、綿が諸国で生産され、その需要も多様化し、綿子の仕立てによる半纏等服飾にも広く供給された。そうした背景において、髻入や小枕、腰挟みが普及し、帯枕部分にも綿を入れて仕立てたのであろう。

幕府の奥向のことを書いた三田村玄龍(鳶魚)著『御殿女中』では、

帯止へは必ずお守札をつける三寸五分に五寸位大をび止の中央の處へ色糸でかゝりつくなり、帯を締めるにも工合よきものなり⁴¹⁾

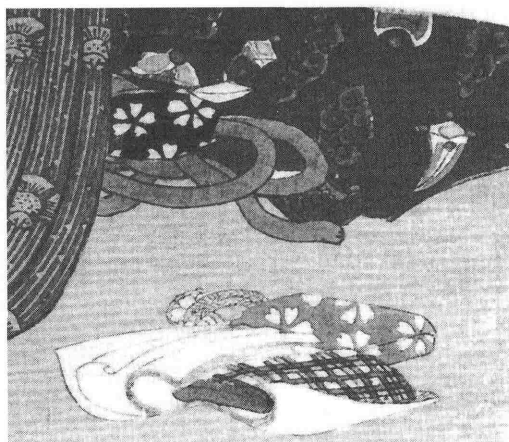


図6 桜模様の帯留(上)と袋物(下)

丸ぐけ紐の帯留には綿を入れた帯枕が付けられ、厚みのある紙入は華麗化の様相を見せている。

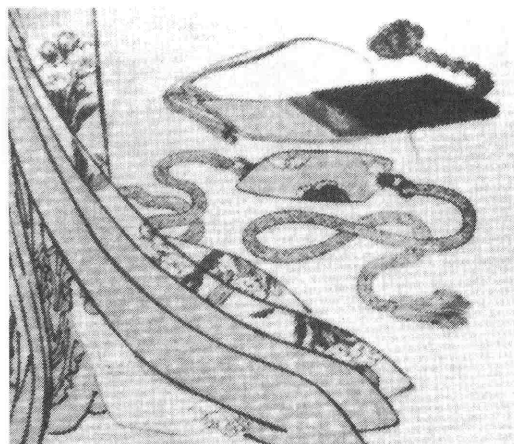


図7 遊女の傍らにある装身具

右奥には鎖付きの懐中鏡を開いた紙入と、中央は帯枕に輪金具で組紐を留めた帯留。

とあり、帯留に守袋を付けることは芯替わりに固定し、締めやすくさせたと記される。同じく武家婦人の装飾品および小道具について『千代田城大奥』には、

帯上げに入る守袋は形ち方形にして幅三寸長さ五寸もあるべし地は赤色の錦にて白麻の裏あり胴締に用ゆる紐は緋縮緬の平グケ（幅五分）なり御臺所女中ともに同じ⁴²⁾

とあり、帯揚げに守袋が入れられたと明示された。守袋が前者では帯留、後者では帯揚げに付けられたと異なり、後者では帯揚げと帯留（胴締）が二分され、守袋は、帯揚げに納められたのである。

結 言

開化錦絵に描かれた明治初期の帯姿を求めると、帯留は帯中央で締められ、帯揚げは帯の間から僅かに見える程度であった。国周（1835—1900）は明治2（1869）年「御代栄有ヶ滝壺」に丸ぐけ紐の帯留と帯揚げをいずれも緋色で表現し、「評判記玉子の当とり」では白地のしごき紐の帯留と緋色の帯揚げが描かれた。翌3（1870）年「東京高轡風涼図」にも緋色の帯揚げと浅葱色のしごき紐の帯留が見られるが、いずれも帯揚げはその結び目が微かに覗くほどであった。帯揚げが帯上部に描写された初見は同7（1874）年の広重画「東京名勝銀座之通煉化石商家之図」とみられ、緋色の帯揚げと紫色の帯留が描写された。さらに同10（1877）年、新しい教育を推進する人物を描いた真匠銀光画「区中小学校置教師亦洋学導所謂生徒嗚呼知識増基」の中で女学校教師の帯には幅広で緋色の帯揚げと細い緑色の帯留が対照的に描かれた。つまり、この頃には装身具としての帯揚げの装いが確立したのである。

本稿を簡約すると、初期帯留の中には、帯枕を入れたしごき紐の帯留と帯枕にくけ紐または組紐を付けた帯留が見られた。前者は、帯中央から次第に帯上部で結ばれ、帯から離れた時点で帯揚げと称され、帯には別に帯留（紐）が締められた。それが今日帯留を帯締と呼称する所以

であろう。また、後者は前者との関連から帯留（紐）と帯枕に二分された。路考結や一つ結など高く結んだ帯を保型するために帯枕が形成されたことを背景に、それは当時の髷入や小枕、腰挟みのように綿を入れた袋状のものに紐を付けたもので、女性の細工物として容易に仕立てられたことから普及したとみられる。すなわち、初期帯留から帯枕と帯留は二分し、帯枕を納めたしごき紐の帯留が帯揚げを形成したのである。以上より、帯揚げは初期帯留から派生したとの結論に至った。

最後に執筆に際し、ご指導を賜りました本学教授佐藤泰子先生に深く感謝の意を表します。

註

- 1) ①遠藤武「服飾によりみたる近世女性の風俗論」「近世帯留考」（『遠藤武著作集』第1巻服飾編 文化出版局 1985）
②同「近世装身具変遷考」（被服文化32号 1955）
- 2) 日本経済叢書刊行會編纂 通俗経済文庫 巻12 日本経済叢書刊行會 P.142 1917
- 3) 日本随筆大成編輯部編 日本随筆大成 第二期10 吉川弘文館 1974 P.6
- 4) 高橋雅夫校注 東洋文庫414 平凡社 1982 P.213—218
- 5) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第2巻 中央公論社 1978 P.226
- 6) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第4巻 中央公論社 1979 P.60
- 7) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第5巻 中央公論社 1979 P.236
- 8) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第8巻 中央公論社 1980 P.230
- 9) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第16巻 中央公論社 1982 P.22
- 10) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第19巻 中央公論社 1983 P.347
- 11) 同書 P.53
- 12) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第28巻 中央公論社 1987 P.15
- 13) 日本名著全集刊行會編輯發行 日本名著全集 第1期江戸文藝之部 第15巻 人情本集 1928

- P.155
- 14) 前掲書12) P.183
- 15) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第3巻
中央公論社 1979 P.334
- 16) 前掲書7) P.46
- 17) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第7巻
中央公論社 1979 P.37
- 18) 前掲書8) P.238
- 19) 蘇武緑郎編輯 花街風俗叢書 第3巻 浪花遊
里風俗篇 大鳳閣書房 1931 P.386
- 20) 日本随筆大成編輯部編 日本随筆大成 第2期10
吉川弘文館 1974 P.42
- 21) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第27巻
中央公論社 1987 P.305
- 22) 喜多川守貞著 魚住書店 1970 P.353-4
- 23) 同書 P.62
- 24) 同書 P.63
- 25) 国立国会図書館蔵
- 26) 蘇武緑郎編輯 花街風俗叢書 第2巻 江戸岡
場風俗篇 大鳳閣書房 1931 P.577
- 27) 前掲書25)
- 28) 前掲書1) ① P.204
- 29) 前掲書22)
- 30) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第12巻
中央公論社 1981 P.335
- 31) 前掲書23)
- 32) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第13巻
中央公論社 1981 P.169
- 33) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第9巻
中央公論社 1980 P.321
- 34) 前掲書30)
- 35) 前掲書22) P.360
- 36) 新潮日本古典集成 浮世床四十八癖 新潮社
1982 P.304-5
- 37) 前掲書35)
- 38) 日本随筆大成編輯部編 日本随筆大成 別巻
嬉遊笑覧1 吉川弘文館 1979 P.186
- 39) 前掲書4) P.210
- 40) 同書 P.234
- 41) P.327-8 春陽堂 1930
- 42) 永島今四郎・太田賛雄著 朝野新聞社 1892
P.91